

ボトムアップ・リスニングー実践報告ー

荻原 洋

(2003年10月20日受理)

A Report of Bottom-Up Listening Practice by Japanese English-learners

Hiroshi OGIHARA

E-mail : ogihara@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：リスニング、ボトムアップ、トップダウン

Key words : listening, bottom-up, top-down

0. はじめに

人の脳が言語を司る仕組みはきわめて複雑かつ驚くべきものであるため、脳の働きの柔軟性が失われる思春期以降に新たに言語を習得しようとすることは、様々な教育理論や教授技術が提案されているにもかかわらず、一般には極めて困難な試みであるといえよう。しかしながら、小学校英語が本格的に始まるなど、外国語、特に英語に対する関心や需要がこれだけ高まっている今日、「極めて困難な試みである」では済まされない。

とはいえ、極めて困難な試みであるため、ただ闇雲に挑戦するのは賢明なこととは言えず、「それなりの準備」が必要である。ここで「それなりの準備」というのは、どの学習(あるいは教育)方法が「実際に効果があるのか」ということを前もって確かめておく、ということの意味している。

ここで「実際に効果がある」ということにはいろいろな条件がついていることを確認しておかなければならない。言語習得理論からみて効果があるはずである、ということは当然であるが、それだけでは実践的とはいえない。学習者の興味・関

心を引き続けることができる方法でなければならぬし、さらには小・中・高校等での英語教育の現場でも無理なく取り組めるものでなくてはならないだろう。このような一連の条件が満たされて初めて「実際に効果がある」と言えるのである。

本小論は、ある種のリスニングの練習が日本人英語学習者に対して実際に効果があると考えられる、という主張を行なうものであり、その実践報告である。

以下、最初にその方法を紹介し、次に実践結果について考察を加え、最後に教育的示唆について考えてみたい。

1. リスニングのメカニズムと実際に行なった練習方法

1.1. リスニングのメカニズム

リスニングのメカニズムの詳細についてはここでは触れないが、要は言語音としてコード化(encoding)されたメッセージを、再び解読(decoding)する過程である。この解読過程において様々な情報が用いられるが、言語音そのものを手がかりとして(頭の中にある辞書と照合しながら)単語や文

を再構成していく過程を「ボトムアップ」と言い、状況や既存の知識などを利用して(聞き取れない言語音を、やはり頭の中にある辞書と照合しながら、推測により補って)単語や文を再構成していく過程を「トップダウン」と言う。そして、実際の解読過程においては、この両方向の過程が瞬時に行なわれ、それらの結果が総合・統合されてメッセージの理解が行なわれていく。¹(河野・津村(1985)、竹内(2000)、等。)

しかしながら、近年のコミュニケーション能力重視の風潮の中で、リスニングの練習といえばトップダウン式のものほとんどを占めるようになってきている。代表的なものには、まとまった量の英文を聞きその内容に関する設問の答えを選択肢から選ぶという練習などがあり、TOEICのリスニング部門や、学校の教科書等にあるlistening comprehensionなどはこのタイプである。

このタイプの練習の要点はメッセージのポイントを掴むということにあり、「語彙の知識」と「状況を把握または推測する力」が大ききものという。メッセージのポイントを掴むためには、連続する言語音の中から情報的に価値の高い語句を探し出すことが必要であり、それは状況を把握し、その状況に当てはまる語句を頭の中の辞書から思い起こしながら、実際に聞こえる言語音の連鎖の中にそれらの語句がないかどうかを捜し求める、という過程であったり、その逆に、言語音の連鎖の中に確認することができた語句を手がかりに、状況を推測しつつ、さらに他の語句の存在についても予測する、という過程であったりする。

従って、「実際に使える語彙」の知識を増やすということは、リスニングにおいて非常に重要な問題であるが、本稿ではそれについてはこれ以上触れない。²

さらに、外国語のリスニングにおいては、その外国語の音韻体系に関する「使える知識」も必要である。日本人が英語を学習する場合、いくら語彙の知識が増えて行っても、“food”を「フード」と音的に認識していたのではいつまでたってもリスニングの力は伸びてゆかない。つまり、連続する英語の音の中から“food”を探し当てるには、少なくとも単語の始まりにある英語の/f/音の音

声的特徴をしっかりと掴んでいなくてはならない。この学習言語の個々の音の音声的特徴をきちんと知ることがボトムアップ・リスニングの基礎となるのである。

1.2. 実際に行なったリスニング練習

今回実践した方法はO'Connor(1980)の提案を具体化したものである。この本は、外国語として英語を学ぶ学習者向けに書かれたもので、そのタイトルどおり学習者の英語の発音をより良くすることを目的としている。特に英語の個々の音の発声方法、子音連続をきれいに英語らしく発音するコツ、強弱のリズムをとるコツ、イントネーションの重要性、などが非常に具体的に説明されている。またそれらの練習の仕方が事細かに指示されており、極めて実践的になっているところが大きな特徴である。ところどころに日本語との違いについても触れられており、私たちにとって大変役に立つ本となっている。

さて、以下はこの本の第1章2節からの引用である。(下線は筆者)

You must hear English. But just hearing it is not enough; you must listen to it, and you must listen to it not for the meaning but for the sound of it. Obviously when you are listening to a radio programme you will be trying to understand it, trying to get the meaning from it; but you must try also for at least a short part of the time to forget about what the words mean and to listen to them simply as sounds. Take one of the English sounds at a time, it might be the English t, and listen for it each time it comes; concentrate on catching it, on picking it out, on hearing what it sounds like. Don't just be satisfied to hear it vaguely, as if it were a sound of your own language; try and pick out the Englishness of it, what makes it different from the nearest sound in your language. (p.3)

この引用箇所の前後の記述も含めて要約すると、

「きれいな英語の発音をするにはまず英語音をしっかりと頭に入れなくてはならない。そのためには、英文を聞いてその内容を理解するという練習とは別に、英語の音そのものを聞く練習が必要である。聞こえてくる英文のメッセージを意図的に無視し、聞き取りたい音の音声的特徴・英語らしさに集中することが大切である」というようなことになる。

一見かなり単純な作業に見えるが、それだけに先に述べたように「学習者の興味を引きつけつつ限られた条件の中で継続的に行なう」ためにはいろいろな点で工夫や準備が必要である。

1.2.1. 学習者

医療系専門学校の1年生44名であり2クラスに分かれている。ただし、今回は仮説検証のための実験ではなくあくまで教育実践なので、統制群・実験群と区別して異なる授業をしたわけではない。リスニング練習を含め、両クラスの授業内容はほぼ同じである。唯一の違いは、練習成果を検証するための事前・事後テストで、テスト問題への慣れという要因が働いているかどうかを確認するために、1つのクラスには事前テストとまったく同じ問題を事後テストにも使い、もう1つのクラスには事前と事後では別のテストを課したことである。なお、この専門学校では英語は一般教養科目であり、1年次に週1回90分を半期だけ15回行っている。

1.2.2. 事前・事後テスト

これにはTOEIC対策用のリスニング練習問題集を使用した。問題は4つのPartから成り、Part(1)は絵(写真)を見てその絵の説明として相応しいものを聞こえてくる4つの英文から選ぶ問題で、説明文や選択肢の英文そのものは印刷されていない。

Part(2)は短い発話に対する適切な応答を4つの選択肢から選ぶ問題で、(1)同様、発話も応答文もその英文は印刷されていない。Part(3)は短い会話を聞いてそれに関する質問に答えるもので、会話の本文は印刷されていないが、質問文と選択肢の英文は印刷されている。Part(4)はやや長めの英文を聞きそれに関する質問に答えるもので、(3)同様、質問文と選択肢の英文だけが印刷されている。

このPart(4)は、1つの本文に対し2つの質問が用意されていて、選択肢も含めるとかなりの量の英文を一度に読んで判断しなくてはならず、慣れていないと相当難しい問題である。今回は事前・事後テストとも、各Part6問ずつ、合計24問をそれぞれ出題した。

事前テストと事後テストの間は3ヶ月であり、リスニングの練習期間は約2ヶ月、最後の練習が済んでから約1ヵ月後に事後テストを実施した。事後テストの前に1ヶ月の期間を置いたのは、事後テストと同時に実施したアンケート調査の中に、リスニング力の向上を自覚しているかどうかという質問があり、リスニング練習終了直後では学習の余韻があって、学習者が「冷静に」判断できにくいかもしれない、と考えたからである。この種の練習では、練習後もその効果が急速に失われることはないと思われ、その意味ではもう少し後のほうが学習効果を知るためには良いのかもしれないが、学習者の練習に対するイメージ(記憶)が「鮮明過ぎず」なおかつ「薄れ過ぎず」の時期として1ヶ月程度が適当と判断した。

また、このリスニング練習は、授業で使ったテキストとは全く関係のないものであり、テキスト自体もリスニングの要素をほとんど含んでいないため、事後テストの成績にリスニング練習以外の要因が影響を与えている可能性は低いと考えられる。また、口頭で確認した限りでは、授業以外に自分で英語の勉強(たとえばラジオやテレビの英会話番組を視聴している等)をしている学生もほとんどいなかったため、事後テストの成績に影響を与えているのはほぼ今回のリスニング練習だけとみなしてよいと思われる。

なお、テスト終了後は問題用紙を回収し、問題についても解説をしたり正答を示したりすることは一切していない。

1.2.3. リスニングの素材

大学や専門学校の教養英語用のテキストから200~250語程度のまとまりのある英文を選んで使った。1話完結でトピックも動物の生態、歴史的逸話、日常生活の話題、異文化紹介、など親しみの持てるものである。

言語材料の選択で注意しなくてはならないのは、英語が簡単であったりテーマが学習者の良く知っていることであったりすると、トップダウン式のリスニングが働き内容から語句を推測してしまうので、個々の英語音に注意が向かなくなってしまう可能性があるということである。学習者が高校を卒業したばかりの専門学校生なので、大学の教養課程用の英文は適当なレベルの言語材料だと考えられる。

なお、毎回の練習毎に目標となる英語音(以下「ターゲット音」と呼ぶ)を決めるが、そのターゲット音が本文中に何回、どんな単語のどの部分(語頭、語中、語末)に登場するかは前もって確認しておかなくてはならない。いつもいつも同じ単語の中でしか登場しないのでは、ターゲット音を探し求める努力をしなくなってしまうからである。(ターゲット音によっては出現回数に大きなひらきがでるが、練習の目的からして、それは一向に構わない。)

1.2.4. 方法

練習の手順は以下の通りである。

- ①ターゲット音の説明：まず選んだターゲット音の音声的特徴を簡単に説明する。またその音を含む単語を示し、語頭や語中、語末などでそのターゲット音がどのように聞こえるかを示す。
- ②1回目のリスニング：ネイティブスピーカーが読む英文を1度聞かせる。このとき、内容を聞き取ろうとせずターゲット音だけに注意して聞くように、つまりターゲット音の音声的特徴にだけ注目するように、指示する。これはこの練習法の大切な部分であり、学習者が内容から語句を推測するトップダウン式のリスニングをできるだけ行わないように気をつける。トップダウン式のリスニングでは個々の英語音に対する明確な音響的イメージを頭にインプットすることができないからである。
- ③2回目のリスニング：2回目に聞かせるとき、ターゲット音に気づいたらその音を含む単語を書き取るように指示する。ターゲット音が頻繁に出てくるような場合は、全てを書き取ることは困難なので、何回出てきたかを指で数えさせ

るだけにする。

- ④ターゲット音の出現場所を確認する：ここで、聞かせた英文のコピーを配り、ターゲット音のあるところをチェックさせる。このとき、カラーマーカーか赤のボールペンを使わせ、ターゲット音のある箇所を視覚的に目立たせる。
- ⑤リスニングの結果を確認する：コピー中の印をつけたターゲット音の数を数えさせて、実際自分が聞き取れた数と比較させる。
- ⑥3回目のリスニング：3回目に聞かせるときには、ターゲット音のある箇所をチェックしたコピーを見ながら、その音だけに集中して聞くように、また本文の意味を考えないように、指示する。これは再度、しかも意識的に、ターゲット音の音響的イメージを頭にしっかりインプットさせるために行なう。
- ⑦4回目のリスニング：最後にもう一度本文を聞かせる。結局、学習者は同じ文章を合計で4回聞いたことになる。最後はコピーを見ずに、ターゲット音にだけ集中して聞くように指示する。このとき、気づいたターゲット音の数を指で数えさせ、最初より少しでも多く気づくことができるよう励ます。

1.2.5. ターゲット音

半期全15回の授業であるから、英語の40以上ある音素を全て取り上げて練習することはできないし、またそうする必要もないと思われる。というのも、全種類の音素を一度に識別できなくても、特定の音素が識別できるようになると、それを手がかりとしてそれ以外の音の識別が容易になるという副次的効果が期待できるからである。

具体的には、まず日本語の音に近いものは除いてよい。むしろ、英語特有の音声的特徴に慣れさせるためには、そのような音はかえって練習しないほうが学習者にインパクトを与えやすいとさえ言える。また、連続する言語音の中に単語を見つけ出すという目的のためには、まず語頭に生じる頻度が高い音を優先すべきであり、その意味では母音より子音を多く取り上げるべきである。

以上の点を考慮して、実際に選んだターゲット音は9種類の子音と2種類の母音の合計11音であ

る。このうち、2音で対比させながら練習した組み合わせが2組あり、実際の練習回数は9回となっている。11音を練習順に並べると次のようになる。

f、s、ʃ、θ、v、b、ð、l、r、i、ɪ

/f/を最初に選んだのは、日本語にない音でおかつ非常にきこえが良い音であるという理由による。きこえが良いのは強い呼気の摩擦を伴うためであり、この日本語にない強い摩擦をしっかりと頭にインプットしてもらおうのが狙いである。さらに、他の摩擦音と比べ、/f/は歯擦音であるため、歯と下唇の間に呼気を流す時間が長く、それだけいっそう聞き取りやすい。

/s/は同じ摩擦音でも日本語のサ行に近い音で比較的聞き取りやすいが、呼気の流出の強さは日本語とは比べものにならない程強い。摩擦(呼気の流れ)の強い別の音を続けて練習することで、摩擦の音響的イメージを頭の中に定着させやすくなると思われる。

/ʃ/は/s/の変異形のようなイメージだが、摩擦音の音色はかなり違う。日本人学習者はその違いを普段意識しにくいので、/s/に続けて/ʃ/を練習することにより、その違いを感じさせようとした。

/θ/は呼気の流れがこれまでの3音に比べかなり小さく、どちらかという聞き取りにくい子音だが、摩擦音に慣れてきたので1つのチャレンジとしてこの段階で導入した。このような音を聞き取れるということも英語を聞くうえでは非常に大切である。なお、ここまでの4つ全てが呼気の強い流出を伴う無声摩擦音であり、摩擦の音がだいたい学習者の耳についてきたと予想されるので、これが終わった段階で1回目のアンケートを実施することにした。

次に同じ摩擦音でも、呼気の勢いが弱い有声の摩擦音へと進み、/v/を導入した。強い摩擦が意識できるようになると、弱い摩擦もずいぶん聞き取りやすくなる。

/b/は日本語のバ行に近く、聞き取ること自体は比較的容易だが、英語特有の強い呼気の破裂を体感させることが目的である。直前の/v/と比べ

ることもできる。

/ð/は摩擦音に逆戻りであるが、有声の歯擦音でありかなり呼気の流れも弱いため、同じ有声音でも比較的呼気の流れが強い有声破裂音の練習の後に導入した。

次の/l/と/r/、/i/とɪ/は、2つの音素を直接対比させながら導入した。そのほうが違いに気づきやすく効果的であると考えられるからである。

まず、日本人にとって非常に難しいと言われる/l/と/r/の区別を練習した。特に日本語のラ行が/l/にも/r/にも属さないのも、音声的特徴を説明する際は、発声器官がとる形も含め、英語音としての特徴的な部分を強調するようにした。

最後に母音を1組だけ練習した。英語の母音はその種類が極めて多く、本来きちんと練習したほうが良いのかもしれないが、最初の段階からあまり細かい違いに注意させると学習者の意欲の低下を招きかねないため、既に述べたように、子音の認識を優先的に考え、母音は簡単に練習することにしたのである。さらに、特定の母音の練習と言うより、母音全体に関わる特徴の1つである「緊張(tense)」と「弛緩(loose)」の違いに気づかせるようにした。tenseかlooseかという区別は、英語の音韻体系の中でも重要な区別であり、英語音を聞き取ったり自分で発声してみる際に、かなり大切なポイントである。にもかかわらず、日本語にこのような区別が無いので、/i、ɪ/の場合でも、緊張度の違いというより「単なる母音の長さの違い」というような認識が広くなされており、聞き分けの困難さを増す一因となっている。今回の学習者も、両母音の違いが長さにあるのではなく、発声器官の筋肉の緊張度にあるということを初めて聞いたような感じであった。また、/i、ɪ/の練習に合わせて、/u/とʊ/の違いにも簡単に触れている。

1.2.6. メリット

本論の最後のところでも触れるが、この方法の利点として次のような点が挙げられる。

- ・教材の準備が簡単である。ターゲット音が適当に出てくる英文を選ぶだけで、内容理解の問題

等を作る必要もなければ、解答用紙を作る必要もない。

- 実施が簡単である。学習者は聞き取れた単語を記入する用紙を準備するだけでよい。また学習者自身が答えをチェックできるので、教員の仕事が特に増えるということもない。
- 短時間でできる。学習者がこの方法に慣れてくると、1回の練習に10分もかからなくなる。また、10回程度行なえばある程度の効果が期待できるので、小中高校などの英語の授業でも十分試してみることが可能である。
- ゲーム的な感覚で取り組める。英文の内容を理解する必要がないので、リスニングの苦手な学習者でも気楽に取り組むことができる。音素の聞き取りそのものも、1、2度聞いて正確に聞き取るようなことが目的ではなく、英語の音に慣れ、その音響的イメージを頭に叩き込むことが目的なので、学習者にプレッシャーになることはない。

1.2.7. アンケート調査

今回のリスニング練習は、ゲーム的要素があるとはいえ、単調な練習であることには違いない。したがって、学習者がこの練習に意義を見出しているかどうか結果を左右する大きな要因になる。そこで、学習開始後の比較的早い時期(4回目終了時)と、全学習終了後の事後テストのときにアンケート形式の意識調査を行なった。(APPENDIX参照)

最初のアンケートでは、①英語(英語学習)の好き嫌い、②英語を使った活動(話すこと、聞くこと、読むこと、書くこと)のうちどの活動が好きか、③今回のリスニング練習で自分のリスニング力に変化があったと感じるかどうか、④リスニングの練習の結果、自分の英語の発音に変化があったと感じるかどうか、⑤英語を聞いて理解するにはどのような力がどの程度必要だと思うか、の5項目について回答を求めた。このうち④はリスニング力とは直接関係ないが、頭の中に英語音の明確な音響的イメージがインプットされると、当然それがその音の発声にも影響を与えるはずなので、それについても自分なりの評価(印象あるいは感想)を尋ねてみたものである。

事後テストと同時に実施した2回目のアンケートでは、まず1回目のアンケートの③～⑤について再度回答を求めた。リスニング練習を重ねることによって学習者の意識がどのように変化したか、あるいは練習の成果をどの程度実感できているかを見るためである。次に1回目のアンケートに入っていない項目として、授業全体についてその内容・活動ごとに「興味・関心」と「難易度」の2つの観点から回答を求めた。これらは、その教科に対する学習意欲や姿勢に大きな影響を与えるので、当然のことながら今回のリスニング練習の成果にも関係してくるはずであるが、要因間の相互作用や因果関係が複雑すぎるため、今回は取り上げることはできなかった。

2. 結果

全学習者の事前テストと事後テストの平均得点と標準偏差は以下の通りであった。

表1 全学習者の平均得点と標準偏差

	事前テスト	事後テスト
学習者数	44	44
平均得点	7.02	9.02
標準偏差	2.73	2.50

また、対応のある1要因の分散分析を行なった結果、平均値の差は1%水準で有意であった。

表2 分散分析表(全体)

要因	SS	df	MS	F
条件	88.00	1	88.00	21.73**
個人差	428.95	43	9.98	
残差	173.98	43	4.05	
全体	690.93	87		** p < .01

SS: 平方和(sum of square)、df: 自由度(degree of freedom)、MS: 平均平方(mean square)、F: F比(F ratio)

また、事前テストと同じ事後テストを受けたクラスAと、事前テストとは違う事後テストを受けたクラスBの平均得点と標準偏差は以下の通りであった。

表3 クラスA(同じテスト)

	事前テスト	事後テスト
学習者数	20	20
平均得点	6.90	9.25
標準偏差	2.86	3.18

表4 クラスB(違うテスト)

	事前テスト	事後テスト
学習者数	24	24
平均得点	7.13	8.83
標準偏差	2.68	1.81

さらにそれぞれのクラス毎に平均値の差を分散分析した結果が表5と表6であり、両クラスとも1%水準で有意であった。

表5 分散分析表(クラスA)

要因	SS	df	MS	F
条件	55.23	1	55.23	17.31**
個人差	305.27	19	16.07	
残差	60.57	19	3.19	
全体	421.07	39		** p < .01

表6 分散分析表(クラスB)

要因	SS	df	MS	F
条件	34.68	1	34.68	8.98**
個人差	123.48	23	5.37	
残差	88.82	23	3.86	
全体	246.98	47		** p < .01

ここで、問題の形式別に得点状況をクラス毎にまとめてみると、以下のようになった。

表7 問題形式別得点状況

クラス	形式	前平均	後平均	前SD	後SD
A	(1)	2.25	2.60	0.97	1.23
	(2)	1.90	2.70	1.52	1.49
	(3)	1.85	2.40	1.04	1.19
	(4)	0.90	1.55	0.91	1.15
B	(1)	1.79	3.00	1.18	1.06
	(2)	2.17	1.46	1.20	1.02
	(3)	1.88	2.33	1.36	0.92
	(4)	1.29	2.04	0.81	0.95

この表から分かるように、クラスAは全ての形式において事後テストの得点が上がっているが、クラスBは(2)の形式において得点が下がっており、これがクラスAとクラスBのF比の差に影響していると思われる。(2)の形式は、短い発話に対する適切な応答を選ぶもので、発話も応答も問題用紙には印刷されていないものであるが、クラスBでこの形式だけ得点が下がる理由は見当たらず、何らかの偶然性の高い要因によるものだと考えられる。

そうであれば、両クラスの平均得点に大きな違いは見られず、事前と事後で同じ問題を解いたクラスAの方に「問題への慣れ」があったとは言えないように思われる。

3. 考察

ここでは、2回のアンケートによる意識調査から分かることを中心に、今回のリスニング練習についてさらに考察を加えることにする。

3.1. 英語に対する好き嫌いとしスニング練習の成果

既に述べたように、教科に対する好き嫌いは学習意欲の大小に関係するので、アンケート中の「英語(英語学習)が好きか嫌いか」という項目に対する回答とリスニング練習の成果との間にどのような関係が見られるかを調べてみた。

今回、得点の伸びは平均で2.00ポイント、その標準偏差は2.74であったので、リスニングの伸びを「平均よりさらに2ポイント伸びた場合(つまり事前テストと事後テストで4ポイント以上の伸びがあった場合)」と「平均より2ポイント下がった場合(つまり、事前テストと事後テストで伸びがまったくなかったかあるいは逆に事後テストのほうが得点が低かった場合)」、そしてその中間となる「伸びが平均の前後2ポイントの間にある場合」の3つに分けてみた。

表8 英語に対する好き嫌いとしスニング練習の成果

	4 ≤	0 ~ 4	≤ 0	合計
好き	4 (29)	6 (42)	4 (29)	14 (100)
中間	3 (30)	7 (70)	0 (0)	10 (100)
嫌い	3 (15)	11 (55)	6 (30)	20 (100)
合計	10 (23)	24 (55)	10 (22)	44 (100)

()内は各行ごとの割合で%値。

この表を見る限り、英語(英語学習)に対する好き嫌いとしスニング練習の成果との間に何らかの関係を見つけ出すことはできないと思われる。しかし、これは逆に、今回試してみたリスニング練習が英語の嫌いな学習者に対してもある程度役に立つものであることを示唆しているとも考えられる。

さらに、アンケートでは英語(英語学習)に対する好き嫌いだけでなく、「英語(英語学習)の中のどのような活動領域が好きか(嫌いか)」を「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のいわゆる4領域に分けて尋ねており、それをまとめたのが以下の表である。

表9 英語(学習)が好き 回答者:14名

	好き	中間	嫌い	合計
話す	7	6	1	14
聞く	8	3	3	14
読む	6	4	4	14
書く	5	3	6	14
合計	26	16	14	56

表10 英語(学習)が嫌い 回答者:20名

	好き	中間	嫌い	合計
話す	3	5	12	20
聞く	12	3	5	20
読む	4	10	6	20
書く	1	5	14	20
合計	20	23	37	80

表11 好きでも嫌いでもない 回答者:10名

	好き	中間	嫌い	合計
話す	2	4	4	10
聞く	5	4	1	10
読む	4	4	2	10
書く	0	6	4	10
合計	11	18	11	40

表10にはかなりはっきりした傾向が現れている。つまり、「英語や英語学習が(どちらかといえば)嫌い」と感じている学習者は、話すことや書くことといった「英語を発すること」が嫌い(あるいは苦手)なのであって、聞いたり読んだりといった「英語を受けとる」ことはそれほど嫌い(苦手)なわけではない、ということである。同様の傾向は表11の「好きでも嫌いでもない」学習者の場合でも、表10ほど際立ってはいないが、見て取ることができる。「話す・書く」の数値が右側に寄っているのに対し、「読む・聞く」の数値は左側により多くなっている。

これに対して、表9の「英語や英語学習が(どちらかといえば)好き」と回答した学習者の場合、能動的な発信型の活動か受動的な受信型の活動かという区別よりもむしろ、「話す・聞く」といった音声英語中心の活動か「読む・書く」といった書記英語中心の活動か、という区別が行なわれており、「読む・書く」活動にはそれほど好みの差は現れないが、「話す・聞く」活動には、明らかにそれを好む傾向が現れている。

以上のことから、英語(英語学習)に対する好き嫌いとしスニング練習の成果の間に何らかの関係が見出されないことについて、次のようなことがその理由として推測されるであろう。

第1に、英語(英語学習)が嫌い(苦手)と感じている学習者は、主として英語を発信するのが嫌い(苦手)なのであり、受信型の活動であるリスニングにそれほど抵抗があるわけではない。したがって、今回のようなリスニングの練習でも最初から成果が期待できないと考える必要はないし、現実に少しではあるが成果は出ている。

第2に、英語(英語学習)が好きと感じている学習者は、「話す・聞く」といったいわゆるリアルタイムのコミュニケーション活動が好きな場合が多く、それは特に話すことに対する好みの大きさに現れている。(表9で、英語が好きと答えた学習者の中で、話すことが嫌いとしているのは1人だけである。)話すことへの興味・関心はかなり強いいため、相対的に聞くことに対する意欲が下がり、リスニング練習の結果に大きな成果が現れない、ということが1つの可能性として考えられる。

3.2. 英語音に対する意識の変化

次に、リスニング練習の狙いに直接関係している「英語音に対する意識の変化」について、アンケートから調べてみたい。意識の変化は「英語音の聞き取り」に関するものと「自分の英語の発音」に関するものの2種類である。

まず「英語音の聞き取り」に関して、「リスニングの練習によって英語の聞き取りに変化があったと思うかどうか」という質問を行い、回答の選択肢として次の4つを用意した。(以下の表中では順番に「全体」「一部」「印象」「なし」と表記する。なお、「その他」の選択肢もアンケートにはあるが、ここでは扱わない。)

- (1) 一般的に以前より英語が聞き取りやすくなったような気がする。
- (2) 練習した音については、以前より聞き取りやすくなった気がする。
- (3) 英語の音の特徴(呼気の摩擦など)が耳につくようになり、英語音に対する印象が変わったような気がする。
- (4) あまり以前と変わらないような気がする。

表12は1回目のアンケートの結果である。

表12 リスニング練習の聞き取りへの効果

	全体	一部	印象	なし	合計
聞き取り	1	15	16	12	44
	(2)	(34)	(37)	(27)	(100)

数値は回答した人数で、()内は%値。

リスニング練習終了後の事後テストと同時に実施した2回目のアンケートでは、新たに「全体」と回答した学習者が3人、同じく新たに「一部」と回答した学習者が6人、新たに「印象」と回答した学習者が4人いた。2回目のアンケートの「変化なし」という回答は、リスニング練習をする前の自分と比べて変化がないのか、第1回目のアンケートの後変化がないのか、微妙な判断であるが、練習の目的からして、1回でも「変化あり」と感じたらそれは意味がある変化と考えてよいように思われる。

すると、最終的には(重複を除くと)、全般的に英語が聞き取りやすくなったと感じた学習者は4人(9%)、練習した音については聞き取りやすくなったと感じた学習者は19人(43%)、英語音の特徴が耳につくようになって英語音に対する印象が変わったと感じた学習者は16人(34%)、まったく変化を感じなかった学習者は5人(11%)ということになる。

学習者のほぼ90%がこのリスニング練習の効果を感じているという結果は、練習方法の簡単さや実際の効果(得点の伸び)と合わせて、この練習方法がリスニング練習の有力な方法の1つであることを示していると言えよう。(なお、最後まで全く変化を感じなかった5人については、「もともと英語音を聞き取る力があつた」という可能性もあるが、事前テスト・事後テストともその得点は全体の平均得点とそれほど変わらないので、その可能性はないと思われる。ただし、この5人の得点の伸びの平均は2.6ポイントであり、全体の平均2.0ポイントを上回っている。本人に自覚がなくてもリスニング力が伸びているということは十分にありうることである。)

次に、「自分の英語の発音」に関し、「(今回のリスニング練習をすることによって)自分の英語の発音に何か変化があったかどうか」という質問を行い、回答の選択肢として次の3つを用意した。(以下の表中では順に「あり」「意識」「なし」と表記する。また、「その他」の選択肢については「聞き取り」の場合と同様、ここでは扱わない。)

- (1) 以前より英語らしい発音になってきたような気がする。
- (2) リスニング練習をした音については発音の際少し意識することがある。
- (3) リスニングの練習は英語の発音に影響を与えないと思う。

表13は1回目のアンケートの結果である。

表13 リスニング練習の発音への効果

	あり	意識	なし	合計
発音	0	29	15	44
	(0)	(66)	(34)	(100)

数値は回答した人数で、()内は%値。

聞き取りの場合と同様に2回目のアンケートでの意識の変化を見ると、2回目のアンケートで新たに「効果あり」と回答した学習者が2人、1回目で「効果なし」と回答していて、2回目で「意識するようになった気がする」と変更している学習者が12人いた。

つまり、最終的には(重複を除くと)、今回のリスニング練習の結果自分の英語の発音が良くなったように感じた学習者が2人(5%)、練習した音については発音する際意識するようになったと感じた学習者が40人(90%)、今回のリスニング練習には発音を良くする効果はないと感じた学習者が2人(5%)ということになる。

自分の発音に対する意識の変化は、英語音の特徴がうまく頭にインプットできたこと(間接的な)証拠であり、ここでも今回のボトムアップ式リスニング練習が実効性のあるものであることが分かる。

3.3. リスニングに必要な力

考察の最後に、アンケートの「英語を聞いて理解するためには、どんな力がどの程度必要だと思いますか」という質問に対する回答を取り上げてみたい。

項目は次の5つである。(「その他」の選択肢も用意したがほとんど回答はなかった。)

- (1) 英語の音を識別する力(耳)
- (2) 英単語の知識
- (3) 英文法の知識
- (4) 話題に関する知識
- (5) 慣れ

この5つの項目の1つ1つについて以下の基準で意見を求めた。

1. それほど必要ではない。
2. 少しは必要である。
3. ある程度は必要である。
4. とても必要である。

この基準の番号をそのまま素点として用い、回答の平均値を求め、さらに2回のアンケートの平均を求めたものが次の表である。(2回の平均値を

求めたのは、2回のアンケートで全体の傾向に変化が見られなかったためである。)

表14 リスニングに必要なだと思うもの

	1回目	2回目	平均
音の識別力	3.70	3.64	3.67
語彙の知識	3.41	3.32	3.37
文法の知識	2.84	2.61	2.73
話題の知識	2.50	2.80	2.65
慣れ	3.73	3.80	3.77

今回の学習者の場合、かなりはっきりとした傾向が見て取れる。すなわち、「音を聞き分ける力」と「慣れ」の2つはほぼ「とても必要」という認識で一致しており、反対に「文法の知識」と「話題に関する知識」の2つは「多少は必要か」という程度の認識である。また「語彙の知識」についても、わりと高い必要性を感じている。

今回のリスニング練習は、これらの「必要性が高い」と感じられている3つの要素にかなり適合するものであると思われる。すなわち、「慣れ」が必要と考えられているが、それは「連続する英語音の中に意味のまとまりを見つけ出す作業」に対する慣れが必要なのであって、そのためには「手掛かりとなる音」の認識が絶対必要である。また、いくら語彙の知識が豊かであっても、それが英語らしい音のイメージと共にきちんと記憶されていなくては、実際に英語音の連続の中にそれを見つけ出すことは難しい。特に語頭の子音などは手掛かりとして重要である。ボトムアップ式のリスニング練習はこのような手掛かりを作り出すためにどうしても必要なものであると考えられるからである。

4. 教育的示唆と残された課題

今回試みたボトムアップ式リスニング練習法は、週1回の授業での実施にもかかわらず、リスニング力を実質的に伸ばす効果が認められた。従って、中学・高校などで週に2~3回実施することができれば、さらに良い結果が期待できるであろう。週に2~3回練習できれば、より短期間で終了するので、学習者はリスニング力の向上をもっと実

感できるかもしれない。

ボトムアップ式のリスニング練習は、その内容が簡単であるため、ともすれば単調(退屈)なものになりがちである。そのためゲーム的な感覚を取り入れるなど、様々な工夫を凝らすことが大切となる。今回の実践の中にある「気づいたターゲット音を指折り数える」方法などは学習者も楽しんで取り組んでいるようであった。これを単語の聞き取りテストのような形で行ってしまうとゲームではなくなってしまう。「気づいた個数」だけであれば、学習者にプレッシャーを与えることはほとんどないようである。

また、学習者がプレッシャーを感じないだけでなく、教員の側も準備や後始末(採点を含む)に煩わされることがないというのは大きなメリットであろう。

最後に今後の課題として考えられるものをいくつか列挙しておきたい。

- ・練習する音素の選択と練習の順番はどうあるべきか。
- ・この練習の効果を実験的な手法で検証してみたらどうなるか。
- ・語彙力との相互作用を実験的な手法で検証してみたらどうか。
- ・ボトムアップ式とトップダウン式を効果的に組み合わせるポイントは何か。

以上のような課題の研究が進むことによって、今回試みたボトムアップ式のリスニング練習がさらに改良され、英語学習に実質的な貢献をすることが期待される。

注

1. 頭の中にある辞書は単なる単語の一覧表ではなく、連語や決まり文句といったような、ある意味文法とも言えるものを内蔵する広い意味での語彙の一覧表であると考えられている。(Nation(1990)、Coady & Huckin(1997)、等。)
- このように語彙を捉えると、実際の照合作業はかなり簡略化され瞬時の照合が可能となり、現実の言語使用のモデルとして現実味を帯びてく

る。(Skehan(1998)。)なお、「文法内蔵型語彙」の例として、*I'm wondering if ~* や、*If I were you, I'd ~* などが挙げられている。

2. 語彙の習得は言葉の学習のあらゆる面においてもっとも重要かつ実効的な課題であるにもかかわらず、「語彙は教えるものではない」という意識が教師の側に強く、正面から取り組まれることは従来あまりなかった。この教師の意識の裏には、語彙の教え方が分からない、という現実的な悩みもあった。しかし、近年コンピュータを利用した言語資料分析が盛んに行なわれるようになった結果、実際の言語使用においては、「文法などの分析的な知識」よりもむしろ「慣用的な語彙の使用」のほうがはるかに重要であるということが分かってきた。(Coady & Huckin(1997)、Nation(1990)、Skehan(1998)、等。)

そのため最近では語彙の学習に焦点を当てた英語学習法がいろいろと提案されまた実に多くの本が出版されている。しかし、それらの学習法や本がすぐに役に立つかということ、それは疑問である。

日本人英語学習者は、今までの英語学習の方法が体に染み付いているので、せっかくの語彙の学習も、今までのような方法で行なおうとする。

しかし、学習の対象は「慣用的な語彙の使用」であって、机に向かって頭だけを使って学習できるものではない。実際の言語使用の場面に身をおいて体で学習するものである。この一番肝心のポイントが忘れられているのである。そしてこの「実際の言語使用の場面に身をおいて体で学習する」は、日本ではよほどの工夫をしない限り手に入らない学習環境なのであり、だれもがたやすく手に入れられるものではないのである。

参考文献

- Allen, French. 1983. *Techniques in Teaching Vocabulary*. Oxford Univ. Press.
- 安西祐一郎、石崎俊、大津由紀雄、波多野誼余夫、溝

口文雄(編). 1992. 『認知科学ハンドブック』. 共立出版.

Coady, J. & T. Huckin.(eds.) 1997. *Second Language Vocabulary Acquisition*. Cambridge Univ. Press.

小池生夫(監修). 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 大修館.

河野守夫、津村文雄(編). 1985. 『Listening & Speaking : 新しい考え方』. 山口書店.

Nation, I. S. P. 1990. *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle & Heinle Publishers.

O'Connor, J. D. 1980. *Better English Pronunciation - New Edition -*. Cambridge Univ. Press.

Rost, Michael. 2002. *Teaching and Researching Listening*. Pearson Education.

Skehan, P. 1998. *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford Univ. Press.

竹内 理(編著). 2000. 『認知的アプローチによる外国語教育』. 松柏社.

田中 敏、山際勇一郎. 1992. 『(新訂)ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』. 教育出版.

APPENDIX

英語音聞き分け練習 アンケート(1回目)

- 英語(あるいは、英語の勉強)は好きですか。
 - 好きなほう
 - 嫌いなほう
 - どちらとも言えない
 - その他
- 英語を使ってする活動のうち、好きなものには○を、嫌いなものには×を、どちらとも言えないものには△をつけてください。
 - 話すこと
 - 聞くこと
 - 読むこと
 - 書くこと
 - その他
- これまでの英語音(息の摩擦がある音)の聞き取り練習(4回)で何か変化がありましたか。
 - 全般的に、以前より英語が聞きとりやすくなったような気がする。
 - 練習した音は、以前より聞き取りやすくなったような気がする。
 - (息の摩擦の音などが耳につくようになり)英語の音全般に対する印象が変わったような気がする。
 - あまり以前と変わらないような気がする。
 - その他
- 自分の英語の発音に関して、何か変化がありましたか。
 - 以前より英語らしい発音になってきたような気がする。
 - 全体的には変わらないが、聞き取り練習をした音については、発音の際少し意識することがある。
 - 聞き取りの練習は発音には影響しないような感じがする。
 - その他
- 英語を聞いて理解するためには、どんな力がどの程度必要だと思いますか。

	とても必要	ある程度は必要	少しは必要	あまり必要ではない
(1)音を識別する力(耳)	4	3	2	1
(2)単語の知識	4	3	2	1
(3)文法の知識	4	3	2	1
(4)話題に関する知識	4	3	2	1
(5)慣れ	4	3	2	1